

素晴らしい須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第4回講座概要

第1部：座学 巡拝の道・富士山で富士講を体験する「富士山と富士講」

■日時

令和元年10月6日（日）9時～12時

■場所

富士浅間神社 社務所

■講師

○ 宮野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教第六世 管長



■講義概要

1. 富士道 神道扶桑教

—パンフレットにある富士山は、心の富士「心字富士」という先達の伝統技法。心の字で富士山を描く。代々の先達の特徴がある。丸く書く人は「心は丸く」、平らに描く人は「心は穏やかに」。

—吉田口8合目の3250mのお宮と富士吉田の850mの富士山元祠、東京世田谷に神道扶桑教大教府本部「富士山太祠」の3つをお守りしている。全国にある講社、神事所、教会所80カ所位がチームになって富士信仰を守っている。

—480年前の元亀3年6月3日富士山のご開祖様である藤原東覚角行様(長谷川角行様)が初めての御頂上は14ヶ年間かけて、少しづつ道を開いて御頂上した。史実では人としては最初の御頂上となっているが、富士上人などがそれまでに登られたという記録はある。角行様は道を作りながら登った人であり、北口登山道はその道を400年以上使っている。心の道を開いたのと同時に、実際の道(road)も開いた。そこが修驗行者と角行様の違いである。富士道の開祖、Roadの開祖と、Soulの開祖である角行様をご開祖と仰いでいる。

—角行様は106歳まで長生きする。富士山の真西の人穴という穴の中で「つま先立ち3000日の行」を行った。10年位までは入口はひざ下まで水があった。おそらく昔も水があり、一寸角の上でつま先立ちの行を3000日したとあるが、水で濡れるので、恐らく30cm角の切り株のようなものを置いて御行をしたのだろう。

—人穴は我々にとって聖地である。106歳まで御行をなさった角行様はそこに葬られている。三次野宮氏の史跡でもあり、世界遺産の構成資産である。角行様のお墓があり、その周りに江戸富士講の先達連中が角行様と共にまたご行をしたいという願いで、お墓を建立したものが300基余りある。

—江戸富士講「江戸八百八町に、八百八講あり、講中八萬人」と言われるほど隆盛した。

—角行様が登頂するまでの富士山の信仰と登頂後の富士山信仰の形が変化している。それまでは富士山は美しいけれど、噴火をする怖い山で、下から拝んでいた。浅間さんは下にある。角行様が作られた道で登頂できるようになった後は、お山に登り拝む信仰形態に代わる。400年前の富士山の信仰形態の変化。そして、我々は今も角行様の作られた道を登っている。

2. 映像を見ながら

—頂上では太陽が目通りより下から上がる所以ご来光は九合五勺の旧水小屋より下で迎える。

—登拝の映像：7月15日東京の富士講本部から80歳の角行様が神の力を宿らせた寸の御鏡=御神寶(みかんざね)を背負い北口8合目の天拝宮に修め、一ヶ月間奉納して、また戻る。

一人穴から歩いて、白糸の滝の上のお鬱水(頬朝公がそこで鬱を直したから)の湧水の池でお行をした。

お鬱水で水垢離をしたと思う。食行様、江戸富士講は下の白糸の滝の横でお行をしたと言い伝えられている。昭和 35 年の登拝風景の映像には、一合目の祓い所で神主が金剛杖の先に幣(ぬさ)をかけてお祓いをしていた。白糸で滝行をしている映像もあった。

—なぜお鬱水か?「富士講の拝み」御文句がある。「西口御淨土末世御助けの為に昼夜六度の垢離を取り…」の垢離=お鬱水だと思う。

—御師の宿 大国屋 に身づくりのため必ず一泊する。

3. 富士講

一角行様の祈りの姿、登って祈るということは、お山(神様)の御体の中に我が身を投じ、我が身を置くことによって自分の小ささを認識し、下りて来るということ。

—三合目には中宮役所があった。馬返まで馬で行き、祓い所で祓いをする。今は崩れているが、一合目ごとにお宮があった。一合目・鈴原社、二合目・御室浅間神社本宮、三合目・大黒、四合目・御座石、五合目・藤森稻荷、五合目から上は天地の境。ここから木が生えない。お参りをして、鈴を鳴らしながら「六根清淨 御山快晴…」と唱えて登る。雨でも唱えるのは、自分のいる所は雨でも御山の上は晴れている、世の中は晴れているという世界観を表している。

—三合目は女人頂上。女性が登るとお山が荒れる=噴火すると言われ、山役人が登山させなかつた。宝永の噴火では東京まで灰が降り、作物がダメになり、物流が止まり、復興に 3 年弱かかつたらしい。お山が荒れることを幕府は嫌つた。山役人は御師に入山料の支払いの確認もした。

—女人頂上からは少し頂上が見えるので、そこから拝んだ。背中を向けると日の出も見えたらしい。なので、お山を拝むため、日の出を拝むための両面鳥居を建てたらしい。

—富士講はその後、6 代目に伊藤身禄食行様という宗教指導者が生まれる。この方は進歩的な人で「なぜ、女人禁制なのか?なぜ女性は穢れているのか?」血の穢れがあるから上がってはいけないと言っていたが、女性の月の血(「華水」と呼んだ)がないと男である我々もこの世に生まれ出しができないのになぜ穢れなのかと言い、女性を上らせようとした。山役人との軋轢が生まれ、男装させて上らせたという話もあった。富士山はご縁年の年だけは女性も上へあがることを許されたという記録もある。当時、日本全ての靈山が女人禁制だった。

—食行様は、経済が混乱していた吉宗公の時代にこの世を改めるために 61 歳で即身入定した。31 日間 1 日 1 杯の水だけで 8 号目の鳥帽子岩の麓でお行をし、ミイラになり亡くなつた。その体がそのままお宮に収められていたが、山役人により切り刻まれた。講社はそれを下ろし、何年後かに石棺を江戸から運び収め 8 号目に埋めた。公にはできないので、その上に身禄堂=今の天拝宮を建てた。

—一人穴ではろうそくを一人一本ずつ持つて入り、火が消えたら空気が薄くなり、あるいはガスが出ている可能性があるのですぐ戻つた。先人の知恵であり、使用したろうそくは安産のお守りになつた。産気づいたら神棚で火をつけ、灯がともっている間に安産が叶う、と言われている。

—出産を控えた人にたとう紙に包んで差し上げる。人穴も 1 つの御胎内。胎内は入口が狭く中が広いので、女性の子宮の中を模している。中へ入って出てくると赤黒い土が体にいっぱい付き赤くなつて出てくる、お母さんのお腹の中から赤くなつて出てくる=赤ん坊になる。生まれ変わり、自己再生。胎内の赤い土は、安産のお守り。「胎内守り」というお守りが 200 年くらい前にあった。当時、12 日間かかる登山は女性・年寄・子供には大変なこと。費用も十両(現在の 80 万~100 万円)かかる。江戸町民にとって高価な旅であり、自分のお金では行けない。それで講社「頬もし講」をつくり、お金を出し合い積み立てた。それでも足りない分は、講長・講元=スポンサーをつけた。

－須走の麻布山三十三夜講の講元は赤坂の更科そば総家の堀井さん。代表者が選ばれて、公金でお山に登る。信仰登山であると同時に、地域の代表者として、行けない女性・年寄・子供の祈願という重大なミッションを担う「代参」である。

－当時の町の女性たちの願いのほとんどが、安産、子育であった。幼児死亡率が高く平均寿命は29歳と言われ、0～7歳の死亡率が非常に高かった。また、産後の肥立ちが悪く、亡くなる方や病に伏せる方も多い。七五三の節句は重要で7歳までに亡くなった子供は神様から預かっていた子が神様の元に帰っただけなので、悔やんではいけないといわれた。お胎内のお土は大変待ち望まれたわけである。講中で行く人たちは、そういう祈りを込めた大きなミッションを抱えていた。

－昔は裸足に草鞋で上がり、三合目で草鞋が傷んでいても傷んでいなくても、必ず履き替えていたので6～7足必要だったと言われ、強力に持たせていた。使った草鞋は馬返で刻んで馬に食べさせた。リサイクル、リユースが出来ていた。

－ここから神様のお体なので、中に入させていただくということになるので草履をはき替えた。結果的に、この作業が平地の種や菌を上げないこととなり、富士山の高山植物の植生を守った。

－富士山へ登る事は単に登山ではなく、お山に我が身を受け入れてもらう為に色々な工夫をした。

- ・①「すあま」を1個持つて行く
- ・②半紙3～4枚懐に入れる。ご不浄の時、お山へ直接ひっかけるのではない。お山に対して、神様に対して、大自然に対しての思いやりもある。

－日本人の登山は自然への挑戦と征服ではなく、自然との協調である。お山に登らせていただいて、大自然を感じ、風が吹いたら神様のお息、お息を頂いていると言う。雨が降ったら神様のお垂れとして受け入れ、ありがたく頂き、一歩一歩足を踏みしめて上る。必ずお頂上は近づいてくれるので、ゆっくりでいいから上がる。最初に先達が付き、二番目に一番弱い人を後ろにつけ、それから後の者が続き、最後に強い先達を付け、一番弱い人の歩みに合わせながら上る。先達の使命は、一緒に行つたものを確実に、安全にお頂上に一緒にあって大自然、神様を体感して帰ってもらうこと。強い風雨の時、どこで止めるかを判断するのも先達で判断はキャリアである。

－装束について

- ・行衣(山装束) 白装束 刺し子にしたものをして着ている方もいる
- ・宝冠
- ・帯はさらしで巻く。講中だけがをした場合、包帯になる。背負子にもなる
- ・手甲・脚絆・足袋 「脚絆の結び目は向こう三里で結べ」と言われた
- ・杖二本 行衣に杖で担架になる

第2部：体験「富士講を体験する」

■講師

宍野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教第六世 管長
秋元 瑞穂 割菱八行講/
荒川 英行 小山一心講
木村 正宏 茅ヶ崎萬一講



■体験概要

五合目～小富士

「六根清淨 御山晴天」と唱えながら歩いた

－八合目からお頂上、お頂上から八合目まで同じコースで行き、山を割らない。八合目の江戸屋さんから須走へ下りる。大申学が定宿だった。明治以降は御殿場から電車に乗って帰った。それまでは、南足柄→最乗寺→小田原→大山阿夫利神社→藤沢、平塚でお山を下りると、下山祝い→江ノ島
－高尾で滝を浴びると精進潔斎